

CEATEC 2025(シーテック 2025)

CEATEC®
Innovation for All

会 期：2025年10月14日(火)～17日(金) 10:00～17:00
 会 場：幕張メッセ(千葉県千葉市美浜区中瀬2-1)
 主 催：(一社)電子情報技術産業協会(JEITA)
 共 催：(一社)情報通信ネットワーク産業協会(CIAJ)／(一社)ソフトウェア協会(SAJ)
 後 援：総務省／外務省／厚生労働省／経済産業省／国土交通省／デジタル庁
 (独)日本貿易振興機構(ジェトロ)／(国研)新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)／
 (国研)産業技術総合研究所(AIST)／(国研)情報通信研究機構(NICT)／(独)情報処理推進機構(IPA)／
 (独)中小企業基盤整備機構／千葉県／千葉市／日本放送協会(NHK)／(一社)日本民間放送連盟／
 (一社)日本経済団体連合会／(一社)日本自動車工業会／日本商工会議所／東京商工会議所／千葉商工会議所／
 (一財)日欧産業協力センター／カナダ共和国大使館 オンタリオ州政府／在日ウクライナ大使館／
 駐日ラトビア共和国大使館／駐日ウズベキスタン共和国大使館
 公式サイト URL：<https://www.ceatec.com/ja/>

総来場者数(参加数)：98,884人
 出展社数：810社
 内訳：(国内出展社数：654社 海外出展社数：156社)
 プレス社数：635名

■開催内容

CEATEC 2025は、日本最大級のデジタルイノベーション総合展として2025年10月14日(火)～17日(金)に幕張メッセ(千葉市)で開催された。開催テーマは「Innovation for All」であり、テクノロジーが社会や暮らしにどのように貢献するかを広く示す場であった。

本展示会は(一社)電子情報技術産業協会(JEITA)が主催し、(一社)情報通信ネットワーク産業協会(CIAJ)、(一社)ソフトウェア協会(SAJ)が共催した。

出展規模は810社／団体におよび、国内外から多様な企業が参加した。これら出展者はAI、IoT、6G、ロボティクス、スマートモビリティ、デジタルヘルス、持続可能な技術など最新技術・ソリューションを展示し、未来社会の実現に向けたビジョンを提示した。来場者は98,884人を数え、幅広い業種・産業の企業関係者、官公庁・自治体・研究機関の関係者から、学生まで多様な層が訪れた。

展示会にはテーマごとの多彩なエリアが設けられ、暮らしのDXや海洋デジタル社会、地方創生、グローバルパーク、AX(AI Transformation)パーク、ネクストジェネレーションパークなど、イノベーションに直結するゾーンが配置された。また、AIを活用した共創体験ツアーやビジネスマッチング企画も実施され、参加者同士のコラボレーション機会が強化された。

またコンファレンスとしては、業界リーダーや技術者による講演・パネル討論など226本に及ぶコンファレンスとセッションが行われ、出展技術の背景や社会実装の可能性について深掘りする場となった。

さらに、優れた技術・サービスを表彰するCEATEC AWARD 2025も注目の企画として実施され、総務大臣賞・経産省大臣賞・デジタル庁大臣賞をはじめ各部門賞として、社会課題解決に資する先進的成果が選ばれた。

CEATEC 2025は、展示会の枠を超え、技術と社会課題を結び付ける「共創の場」として、幅広い関係者が集い、新たな価値創出につながる交流と未来構想の発信拠点となった。



■ 2025 年度の新規取り組みとその成果・特色など

▼ ビジネスマッチングシステムの導入

CEATEC 2025 では従来の展示・コンファレンス中心の構成に加え、「共創」をより強化する新規取り組みとして、ネクストジェネレーションパークを中心にビジネスマッチングやパートナー探索の機会を体系的に提供し、具体的な協業機会につなげる仕組みが強化された。

▼ エコ&デザインチャレンジ制度を新設

CEATEC 2025 では、新たな取り組みとして「エコ&デザインチャレンジ」を導入した。本取り組みは、(一社)日本イベント産業振興協会 (JACE) の協力のもと実施されたもので、展示会運営における環境負荷低減と、展示空間全体のデザイン価値向上を同時に実現することを目的としたものである。出展者が環境配慮と創意工夫を両立した展示手法に挑戦する機会を提供し、持続可能な展示会の在り方を社会に発信することを狙いとしている。

エコ&デザインチャレンジでは、再利用可能な部材の活用、廃棄物削減につながる設計、エネルギー使用量の抑制といった環境配慮の視点に加え、来場者の理解を促進する分かりやすい構成や、メッセージ性の高い空間演出など、デザイン性の観点を評価軸として設定した。これにより、単なる省資源対応にとどまらず、環境配慮そのものを価値として伝える展示表現を促進した。

